

思い翔る空

フジキサエ

Prologue

スケートボードの板(デッキ)を蹴って、トリックを決めた瞬間。
沸き上がってくる、達成感と手応え。
声を上げて、仲間たちと喜び合う。
でも、全員とハイタッチしたあとに、するりと何かが胸に忍び込む。
パズルのピースが埋まらないような。
満たされないコップがまだあるような。
物足りなさ。

いったい何が足りないのだろうか。
俺はまだそれを見つけられていない。

学校から家に帰ってきて、亮介(りょうすけ)が一番にやることはリビングのテーブルの上を確認することだ。今日もテーブルの上には、千円札が一枚だけ置いてあった。どうやら母親は亮介が学校に行っている間に帰ってきて、また出勤したらしい。

自宅マンションから最寄り駅まで、徒歩五分。二年前に両親が離婚し、亮介と母親がふたりで住む部屋を探すことになったとき、まず利便性の良さが重視された。

母親がソフトウェア会社のマネージャーという仕事柄、終電で帰宅はもちろん、泊まり込みも珍しくない。今日のように仕事の合間を見つけて、帰宅して、家事をして、また出勤するといった慌ただしいことをやってのけるには、この部屋は最適な立地といえた。

だが、彼女の家事は、いつもどこか中途半端な印象が漂っていた。

リビングからベランダは一続きになっており、洗濯物が揺れているのが見える。けれど、ベランダに出られる窓の前には、生乾きの洗濯物が入ったままの洗濯カゴが放置されていた。干しているうちに時間がなくなったのだろう、と亮介は予想した。

この放置されている洗濯物を全て亮介が干してしまうのは簡単なことだ。けれど、完璧主義者の母親は、亮介が家事をすることを嫌った。この洗濯物を干したりしたら、喜ばれるどころか、苦い顔をされる。

一息ついて、亮介は洗濯カゴの中から、自分のトランク스와ワイシャツだけを引っ張り出した。

母親のプライドを傷つけずに、亮介の生活を滞りなく送るためには、ちょっとしたコツが必要なのだ。

窓際で眠っていた黒猫が亮介に気付いて、体を起こした。

母親と二人で住む家を決めるとき、亮介は猫が飼えることを主張した。この黒猫は、亮介が産まれた頃から一緒に、名前をネロという。亮介の兄弟といっても、過言ではない。

亮介は足下にじゃれついてくるネロを適当にあしらいつつ、自室に足を向けた。トランク스와ワイシャツをこっそり自分の部屋の片隅に干して、亮介は学ランから普段着に着替える。

一度、リビングに戻り、ネロのエサと、水が補充されていることを確認する。そして、玄関の片隅に置いてあったスケートボードを抱えて、亮介は家を出た。

鍵を閉めるとき、ドアの向こう側で、ネロが、にゃあ、と一鳴きしたのが聞こえた。

自宅近くにある橋は、歩行者専用で、夜になるとぱたりと通行する者がいなくなる。スケートボードの練習をするには格好の場所だ。

六月の頭から降り続いていた雨が、ようやく上がった今日。橋にはスケートボードを片手に、亮介の年頃の少年たちがたくさん集まっていた。

亮介も橋の隅の方で、トリックの練習をしていた。勢いをつけて、ジャンプする。と、バランスを崩して、派手に転倒した。

すぐ近くで、笑い声がした。

「派手にこけたなあ」

ブレザー姿の少年が、転がっていった亮介のスケートボードを拾い上げた。

「佑人(ゆうと)さん！」

パッと亮介は笑顔になって、素早く立ち上がった。

「亮介は勢いに頼りすぎなんだよ。ちゃんとバランスをとらないと、トリックは綺麗に決まらない」

佑人は持っていたスケートボードを道路に放ると、素早く乗った。デッキを蹴り上げ、道路に右手をついて逆立ちした。ハンドプラントだ。先ほど亮介が失敗したトリックだった。

あまりにも鮮やかで、亮介はため息をつくしかなかった。

佑人はこの場にいる少年たちの中で、一番巧い。佑人は十八歳で、亮介は十四歳と若干年は離れているが、あることがきっかけで知り合った。

今では、亮介にとって佑人はスケートボードの師匠であり、一番の友人でもあった。

「佑人さん、自分のスケボーは？」

「家だよ。まだ帰ってねえもん」

「また補習ですか？」

「まあな」

以前はよく二人で練習をしたが、佑人が高校三年になってからは亮介がひとりというのが常になっていた。

「それより、亮介。大会のこと、考えといてくれたか？」

佑人が大会と呼ぶのは、賞金大会のことだ。

亮介はアマチュアの大会なら何度か参加して、上位入賞もしていたが、賞金大会には一度も参加したことはなかった。

「俺はやっぱり無理ですよ。まだ早いっていうか……」

「そうか？ 俺だって初めて大会に出たのは十四歳のときだったぞ」

「佑人さんは特別なんですよ」

笑いながら、亮介は佑人からスケートボードを受け取った。

「ハンドプラントのコツ、教えてくださいよ」

「ん。やってみな」

佑人がコンクリートの上に座り込んだ。

デッキに片足を乗せ、亮介が地面を蹴ろうとしたとき、背後から「佑人」と呼ぶ声があった。振り返ると、見知った人物が立っていた。

佑人と同じブレザー。佑人と同じ顔。違うのは、眼鏡をかけていることだけ。佑人の双子の弟の佐人(さと)だ。

佐人は亮介をみると、小馬鹿にしたような笑みを浮かべて、自分の頬を指さした。

「また失敗したのか、少年。汚れてるぞ」

無然としたまま、亮介は手の甲で頬を拭った。

「何の用だよ、佐人。今は勉強の時間だろ」

「あいにく今日は予備校が休みなんだ。それに心配してもらわなくても、一日勉強しなかったからといって、俺の成績は揺らがない。ああ、少年の成績も揺るがないよな。底辺からは落ちようがないものな」

「俺は一度だって赤点を取ったことは……」

「で、佐人、何の用だよ」

亮介が言い返すより先に、佑人が言葉を挟んだ。

ニッと佐人が笑う。

「母さんが帰ってきてる」

「今日は地方ロケだろ」

「早く終わったんだって。久しぶりに家族水入らずで食事をしたいから佑人を呼んでこいって。ご命令」

佑人と佐人の母親は女優だ。テレビドラマで良く見かける。以前、亮介と佑人が一緒に駅前を歩いていて、巨大テレビジョンに彼女のインタビューが流れたことがあった。佑人がテレビジョンを見上げて、「母さん、今日も元気だなあ」と言って、亮介は仰天した思い出があった。

佑人は渋々立ち上がった。

「ごめん、亮介。また今度な」

「あ、うん」

名残惜しい顔で、亮介は頷いた。

立ち去り際に、佑人が「ああ、そうだ」と振り返った。

「亮介、お前、俺のスケボー欲しがってたよな」

佑人のスケートボードは、彼が手ずからカスタマイズしたものだ。何度も頼み込んで、一度だけ使わせてもらったことがあった。重さと瞬発性が絶妙で、どんなトリックも綺麗に決まった。

「大会で優勝したら、あれ、やるよ」

さらりと言われて、亮介は驚いた。

佐人も眉を寄せて、佑人を見た。

「俺のスケボーやるよ。だから、大会のこと、考えてみて。七月の二十日あたりに大きいのがあるんだ。入賞すれば、賞金三万円ももらえるからさ」

満面の笑顔を残して、佑人はきびすを返した。

佐人が肩をすくめて、その後を追う。

亮介は呆然と二人を見送るしかなかった。

どんなに佑人があのスケートボードを大切にしているか、知っていた。冗談で「くださいよ」と言っても、絶対に頷いてくれなかった。それだけに、今ここでくれると言う佑人の真意が理解出来なかった。

「……」

無意識に、亮介はシャツの胸を掴んでいた。

次の日、気分が晴れないまま学校へ登校した亮介は、朝のホームルームに配られたプリントを見て、余計に気分が沈んだ。

プリントには『修学旅行の積立金の不足のお知らせ』と書いてあった。

「後ろまでプリント回ったか？ 大事なお知らせだからな。ちゃんと親御さんに見せろよ」

ざわめく教室を見回して、担任はプリントを示した。担任が面倒くさそうに頭をかくと、縮れたくせ毛が揺れた。

「お前たち、今年の十月に修学旅行で長崎に行くのは知ってるよな。そのときの飛行機の運賃が上がったんだと」

修学旅行の金は一年生の頃から、積み立てていた。このままだと足が出てしまうと、プリントには書かれていた。

「ひとり三万円。七月の頭までに振り込んで欲しい、ということだ。分かったか。遅れるなよ」

他のクラスメイトが何処吹く風といった顔で、担任の話を聞き流している中、亮介の心は落ち込んでいった。

浮かない気持ちを引きずったまま、亮介が帰宅すると、ベランダに母親がいた。母親はスーツ姿で洗濯物を干している。

てきぱきと動く様子は、家事をしているというよりも、オフィスで仕事をこなしているように見える。

亮介の目から見ても、母親は若々しい。今年三十六歳になるのだが、中学二年生の子供がいるとは思えない。

母親がリビングで佇んでいる亮介に気付いて、微笑んだ。

「あ。お帰り、亮介」

「母さん、仕事、どうしたの」

「これから行くよ。昨日は徹夜だったから、本当は今日、休むつもりだったんだけど。さっき電話があって、トラブルってるみたい。ちょっと行ってくる」

コンビニにでも行くような軽い口調で母親は言った。

けれど、今夜も徹夜になるのだろうと亮介は予想した。

洗濯物を干し終えた母親は、からっぽのカゴを脱衣所に持っていった。

すれ違いざまに、亮介はプリントを手に、声をかけた。

「母さん、あの……」

ちらりと母親は亮介の方を見た。が、足を止めることはなかった。

「何？」

「これ、今日、学校で配られたんだけど」

「給食費？ それなら机の上に置いておいて。明日、お金置いておくから」

亮介の話を全部聞かずに、母親はそそくさとリビングに戻ると、床に置きっぱなしになっていた通勤鞆に荷物をつめた。

「全く、お金が出ていくばかりね。嫌になっちゃう」

母親は苦笑いして、玄関へ向かった。

「鍵閉めといて」

慌ただしく、母親はドアの向こう側へ消えていった。

ヒールの音が遠ざかっていくのを聞きながら、亮介はダイニングテーブルの上に千円札が置いてあったことに気付いた。

言われた通り、このテーブルの上に亮介が手にしているプリントを置いておけば、明日は三万円も置かれているだろう。

けれど、何故か、亮介はそれを素直に実行することが出来なかった。

給食費や教材費等と同様に、正当な理由のある金なのだから、もらうことに後ろめたいことはないはずだ。けれど、亮介は気が引けた。飛行機の運賃が上がらなかったら、不要だった金。それを母親から受け取ることが、亮介の中でよしと出来なかった。

プリントを見つめたまま、ためらっていると、足元にやわらかいものが触れた。思わず亮介はプリントを取り落とした。足首にまとわりついてくるネロに気付いて、亮介は息をつく。

「……なんだ。ネロか」

ネロがしきりに鳴いて、すりよってくる。

「どうした？」

しゃがみ込んで、亮介はネロを撫でた。

するとネロは、するりと体をひるがえして、窓際へ走っていった。亮介が目で追うと、ネロはエサの皿の前で、振り返って、鳴いた。皿が空っぽだった。

「なんだ。母さん、エサやり忘れたのか」

エサを補充すると、ネロは勢いよく食べ始めた。ついでに水も満杯にしておく。

亮介はネロの傍らにしゃがみ込んだ。

「お前……俺がいなかったら、どうしてたんだよ……」

一心不乱にネロは餌を食べる。

亮介には目もくれない。

ネロの毛を撫でながら、ぽつりと呟いた。

「母さんからエサもらわないと生きていけないだろ」

ふ、と。

亮介の手が止まった。

「……俺も同じか」

母親から金を受け取り、母親に面倒をみられる亮介。

母親から餌をもらい、母親に世話をされるネロ。

どちらも母親の側から見たら、違いなど些細なものなのかも知れないと亮介は思った。

ネロが顔を上げる。

にゃーう、と鳴く。

亮介はネロに微笑むと、素早く立ち上がった。床に落ちていたプリントを拾って、部屋に駆け込む。普段着に着替えると、スケートボードを抱えて、家を飛び出した。

全速力で走りながら、亮介は携帯電話を取り出した。

Request

「大会に、出る？」

佑人は笑顔で。

佐人は渋面で。

双子は、同じセリフを言った。

いつもの橋の上。

亮介が呼び出したのは、佑人だけだったが、何故か、佐人も一緒にいた。だぼだぼのパーカーにハーフパンツという格好の佑人と対照的に、佐人はブレザー姿のままだった。

亮介は佑人に頭を下げた。

「佑人さんにコーチを頼みたいんだ！ 俺、絶対、入賞したいんだ！」

「もちろん……」

「反対だ」

佑人が答えるより先に、佐人が言い切った。

もう一度、佐人はくり返す。

「俺は反対だ」

キッと顔を上げて、亮介は叫んだ。

「佑人さんに頼んでいるんだ。あんたには関係ない！」

「関係ないわけないだろう。佑人は……」

「佐人！」

鋭い語調に、佐人が黙った。

佑人は少しためらったあとに、口を開いた。

「亮介の大会が終わるまでだ。大会が終わったら、さっきのこと、やるからさ」

亮介には佑人の言っている意味が分からなかった。

だが、佐人はそれで通じたようで、納得したように、頷いた。

「本当だな」

「ああ」

「オッケー。じゃあ、俺は何も言わない」

佐人は肩をすくめて、黙った。

嫌な予感がして、亮介は佑人を見た。が、佑人は亮介を安心させるように笑うだけで、説明はなかった。

「さっそく、練習しようぜ。時間はないぞ、亮介。大会は来月だからな」

「……ああ」

腑に落ちなかったが、亮介は曖昧に頷いた。

翌日、亮介は登校すると、一番で職員室へ行った。

隅にある給湯スペースで茶を入れている担任をつかまえて、亮介は用件を伝えた。

「積立金の支払いを待って欲しい？」

湯呑み片手に、担任は面倒くさそうに言った。

亮介は大きく頷く。

「はい。七月末でいいんです。待ってもらえませんか」

「……」

眉根を寄せて、担任は湯呑みに口を付けた。

賞金大会は七月二十日。もし入賞出来たら、七月末には賞金で支払えるという算段だ。

ばりばりと縮れたくせっ毛をかいて、担任は何度か頷いた。

「ま。いっか」

「いいんですか」

「ああ」

担任はペタペタとサンダル音をさせながら、自分の席に戻った。

亮介はそのあとについていく。

「ありがとうございます」

「確認するけど、行くんだろう」

「はい」

「一年の時みたいなことにはならないんだな」

担任の言葉に、亮介はこめかみを引っかいて、ばつが悪そうに笑った。

亮介は一年次に母親の断りもなく、勝手に担任に「お金がかかるから修学旅行に行かない」と言った前科があった。

すったもんだの末、母親にまで連絡がいき、亮介は渋々と積立金を持っていくはめになったのだ。

「あれに比べたら、不足金の締め切りを待つぐらいどうってことないな。その代わり、ちゃんと不足金持ってこいよ」

「はい！」

お辞儀をして、亮介は職員室をあとにした。

土曜日だったので、授業は午前中で終わり、亮介は昼食もそこそこに橋へ行った。

橋には、ブレザー姿の佐人がひとりで居た。

柵に背を預けて、参考書を読んでいた佐人は、亮介に気付くと、いつもの皮肉げな笑みを浮かべた。

「佑人から伝言。『補習で橋に行けるのは三時過ぎになる』ってさ」

反射的に、亮介は佐人へ可愛げのない言葉を返す。

「そんなのメールでも良かったのに」

「出来なかったんだよ。補習を逃げようとしたところを、担任に捕まったんだから」

こっそり教室を抜け出そうとして、担任に見つかった佑人を、亮介は想像した。

久しぶりに佑人と長時間練習が出来ることを楽しみにしていた亮介は、少なからずがっかりした。けれど、仕方ないとあきらめて、一人で練習を始めることにした。背負っていたカバンを道路に放って、スケートボードに片足を乗せる。

佐人がまた参考書を開いたので、亮介は怪訝な顔で振り返った。

「何でいんの」

「佑人が担任に連れて行かれながら、『あと、よろしく』って言ってた。だから、あいつが来るまで、ここにいる」

担任に襟首を掴まれて、ずるずると引っ張って行かれながら、『あと、よろしく』と叫ぶ佑人を想像する。

きっと深い意味はなかったんだろうなと亮介は思ったが、口には出さなかった。ときどき、佐人はこのような愚直ともとれる行動をし、亮介を悩ませた。

大きく息を吸って、空を見上げる。梅雨晴れの空は、透き通っていた。よし、と呟いて、亮介は練習を始めた。

佑人と亮介は昨日話し合って、大会ではハンドプラントを決め技に持って来ようという結論に達した。そのため、今日はハンドプラントの練習に費やそうと決めていた。くり返しハンドプラントにトライし、ようやく一回だけ成功した。

「しゃあ！」

思わず叫んで、亮介はガッツポーズをした。

「少年」

佐人の声に振り向いて、反射的に投げられたものを受け取った。ペットボトルのスポーツ飲料だ。

「そろそろ休憩しろ。一時間半も練習しっ放しだろ」

佐人の事務的な物言いに、興奮が一気に冷めた。しらけた顔で、亮介はコンクリートに腰を下ろした。

傍らに佐人がいる気まずさを誤魔化すように、亮介は口を開いた。

「東雲高校って、厳しいの？」

「いや。都立の中では自由な方だろ」

「佑人さん、勉強ばっかしてない？」

「あいつは赤点取りすぎなんだ。さすがに教師に目を付けられてる」

「ふうん」

「うちの高校に来る気か？」

「んー、まあ。近くの公立は東雲ぐらいだし。うち金ないし」

「良いんじゃないのか。基本的に赤点を取らなければ、何をやっても構わないという校風だ。部活動も自由参加だから、スケボーを続けるのにも支障がない」

意外にも全く毒のない答えが返ってきて、亮介は拍子抜けした。思わず、亮介は佐人の横顔を仰ぎ見た。

佐人が携帯電話を開いて、「もうすぐ三時か」と呟いた。それを聞いて、亮介は立ち上がった。

「佑人さんが来るまでに、もうちょっと巧くならないと」

デッキに足を乗せる。道路を蹴って、走り出す。と、そのとき、亮介の視界の隅に、佑人が映った。

ふ、と。

亮介の気が緩んだ。

その状態でデッキを蹴った。失敗すると直感した。体が強ばり、放り出される。立て直す暇はなかった。右肩から全身へ鋭い衝撃が走った。

「亮介！」

佑人の叫び声を遠くに聞きながら、亮介はコンクリートの上に転がった。

都立記念病院のロビーで長椅子に座っていた佐人は、受付で『水上亮介』の容態を問う女性がいることに気づき、顔を上げた。

佐人が声をかけると、女性は亮介の母親だと名乗った。

「亮介くんは今、検査をしています。私の兄が付き添っていますので、安心してください」

「検査...？」

「頭に異常がないかの検査です。一応、怪我は肩の打撲だけですが、倒れる際に頭を打っていたので」

「おおごとではないのね？」

「はい。全治一週間程度だそうです」

「良かった」

一息ついた彼女に、佐人は微笑んだ。

が、彼女が次に言ったことに、佐人は耳を疑った。

「じゃあ、お金は支払っておくから。あとはお願いするわ」

「亮介に会わないんですか」

「会って、どうするの？」

「いや.....顔を見るとか.....」

「別に命に別状はないんでしょう？ それなら、わざわざ会う必要はないんじゃないかしら」

「そうですが.....」

「あ、ちょっと、ごめんなさい」

靴を押さえると、彼女は足早に病院の通話スペースへ向かった。携帯電話を取り出して、話し始める。

こっそりと佐人は通話スペースへ近付いていった。彼女が「大丈夫」「すぐ戻る」と言っているのが聞こえた。

電話が終わると、彼女は佐人のことを振り返らずに、会計の方へ行ってしまった。

しばらくして、佑人と亮介が佐人の元へやってきた。

釈然としない顔をしている佐人に、佑人は不思議そうに声をかけた。

「お待たせ。なんかあったのか」

「亮介の母親がきた」

「マジで。どこにいんの」

「仕事に戻った」

「は？」

呆気にとられている佑人を放って、佐人は亮介に話しかけた。

「お前の母親って、いつも『ああ』なのか？」

「金は払っていつてくれた？」

「みたいだな。あとで、会計で確認するけど」

「良かった。手持ちの金で足りるか心配だったんだ」

眉間にしわを寄せている佐人に、亮介は小さく笑った。

「仕方ないんだ。忙しい人なんだ」

しばらく、佐人は険しい顔をしていたが、ひとつ息をつくいた。佐人が自身のこめかみを指さす。

「大丈夫だったのか」

亮介は一瞬きょとんとした後に、笑って頷いた。

「頭？ ああ、全然。異常なし」

佐人は頷くと、自分の腕時計に目を落とした。

「五時過ぎか。少し早いが、どこかで何か食べてから帰ろう。おごってやる」

「えっ、いいの？」

意外な提案に、亮介は驚いた。

佐人は無表情のまま、眼鏡のブリッジを押し上げて、答えた。

「嫌なら別に……」

「行く行く行く！」

佐人が言い終わるより早く、亮介は答えた。

そして、元気よく佐人を振り返った。

「佑人さんは何食べたいですか？」

「俺？ 俺はなんでも。お前は？」

「肉！」

亮介の言下に、佐人が答える。

「じゃあ、ファミレスだな」

そして、佐人はさっさと会計へ歩いていってしまう。

慌てて、亮介と佑人はそのあとを追いかけた。

肩の怪我が治るまで練習はするな、と佐人に厳命された。佑人からも、イメージトレーニングにしとけ、と言われた。そのため、亮介は退屈な放課後を過ごすはめになった。

学校から帰宅した亮介は、いつも通り、母親が放置した洗濯カゴからトラックスとワイシャツを引っ張り出して、自室に干した。鴨居に吊す際に、右手を使ったら、肩が鈍く痛んだ。

右肩を軽く手のひらで揉むようにして、ベッドに腰を下ろす。ベッドの上に放ってあったスケートボード雑誌を取って、寝転がった。今日で五日目。メイクのイメージは脳裏に焼き付いてしまうほど、鮮明に描けている。早く実践で試したくて、体が疼いた。

玄関が開く音がした。亮介がリビングをのぞくと、案の定、母親がいた。

「母さん？ 早かったね」

「あら、亮介。いたの。忘れ物を取りに来たの。亮介がいるなら、持ってきてもらえば良かったわ。もう遊びに出たと思って……」

そこで母親は、今、亮介の怪我を思い出したように、言葉を切った。

母親が亮介を振り返る。

「肩の具合はどう？」

「ん……まあまあ」

「そう。良かった」

まるで火の元の点検をしたような事務的な口調で、その会話は終了した。

リビングの机の上に置かれていた封筒を手にとると、母親はせわしなく出ていった。ドアの前で振り返り、亮介へ「おとなしくしているのよ」と、ネロに「いい子にしているのよ」と言い残して。

軽やかに遠ざかっていくヒールの音を聞きながら、亮介はネロと目を合わせた。

「『おとなしくしているのよ』だって」

しゃがみ込んで、ネロを撫でる。

「お前と一緒にだな」

母親にとって、亮介もネロも扶養家族のひとりといえる。だが、亮介は釈然としなかった。

ネロは餌をもらう代わりに、主人を癒す役割がある。甘えて、愛嬌を振りまいて、疲れた主人をリラックスさせる。

亮介はネロと同じ立ち位置にいたいとは、思わなかった。具体的には言葉に出来ないが、それでも母親にはネロとは違うものだとは認識されたかった。

顔を上げて、立ち上がる。亮介の瞳には確固たる意志が光っていた。

Consent

肩の怪我も治り、あと一週間で大会という日、亮介が学校から帰ってくると、玄関の三和土に母親の靴があった。

「母さん？ いるの？」

家の中に声をかけつつ、リビングに行くが、母親の姿は見当たらなかった。ベランダにもいない。母親の部屋のドアが開けっ放しなので、覗いてみるが、人影はなかった。

ふと亮介はネロが亮介の部屋の前で、背筋を伸ばして座っているのに気付いた。もしかして、と自身の部屋のドアを開ける。

部屋の中央で、母親が横座りしていた。

そして、今朝までは整頓されていた部屋の一角が、今はまるで嵐にでも遭ったようなありさまになっていた。具体的に言えば、机が荒らされていた。引き出しという引き出しがすべて開け放たれ、中身がかき混ぜられている。プリントは一枚残らず散乱していた。

その荒れた部屋の中央に、母親が居る。

母親の丸まった背中が上下しているのが分かった。

「……っに、してんだよ」

喉に引っかかって、うまく発音出来ない。

母親は黙ったまま。

嫌な予感がする。

得体の知れない不安を消し飛ばすように、亮介は叫んだ。

「何してんだよ！」

母親は畳に目を落としたまま、ゆっくりと体だけ亮介の方を向いた。いつものきびきびした動きとはかけ離れた動作に、思わず亮介は半歩退いた。

「母さん……？」

「なんであんたはこういうこと平気で出来ちゃうのかな」

母親が手に持っていた紙を、畳に落とした。修学旅行の積立金不足のお知らせと、賞金大会のチラシ。どちらも亮介が机の奥深くにしまい込んでおいたものだ。

疲れたように母親は笑った。

「探すの大変だったわ」

「なんで……勝手にそんなこと……」

「勝手はどっちよ！」

叩きつけるような叫び声に、亮介はびくりと震えた。亮介の記憶の中で、母親のこんな声を聞いたのは、父親と夫婦喧嘩をしているときだけだ。二人で暮らすようになってからは、初めてだ。

「さっき、担任の先生から電話があったの。修学旅行の不足金、銀行の都合で二十五日までに振り込んで欲しいって」

思わず、亮介は「あのバカ」と呟きそうになった。担任に口止めをするのを忘れていた。あの担任なら察してくれると、身勝手な期待をしていた。

母親の恨みがましい視線が、亮介の体にまとわりつく。

その視線から逃れたくて、亮介はそっぽを向いた。

「あんた、先生に月末まで支払い待って欲しいって言ったそうね」

亮介は押し黙った。

その態度が母親の神経を逆撫でした。母親は早口でまくしたてる。

「一年生のときに言ったよね。修学旅行のお金くらい出せるって。どうしてこんな勝手なことしたの」

「それは……」

亮介は口を開けて、力なく閉じた。どんなことを言おうとも、言い訳じみた理由にしか聞こえないような気がした。

母親が深くため息をつく。

「あんたがこういうことして、何言われるか分かってんの。片親だからお金がないんだとか、子供に充分に食べさせてないんだろうとか、片親だから普通の子とは違うんだとか、そういうこと言われるの」

「そんなこと言われたこともないし、聞いたこともないよ」

「当たり前でしょ。私たちのいないところで言ってんのよ！」

母親の甲高い声が、亮介の耳に突き刺さる。亮介は出来ることなら耳をふさいでしまいたかった。

「隙を見せたらダメなの。普通の家庭と、お金だって、教育だって、何一つ変わらないって見せつけないと。あいつらは何だって言うてくるの！」

「そんな……」

「なんであんたはそんなぼんやりなの。私の気持ちなんて察しようとししないで！」

母親の心の底にあったどす黒いものが、吐き出されたかのように、思わず亮介は顔をしかめた。その中に含まれているのは憎悪や悔しさ、歪んだ侮蔑。その腐臭に、亮介はたじろいだ。

「とにかく、大会に出るのはやめなさい。お金ならあげるから」

母親の命令を、亮介は反射的に拒んでいた。

「なんで。やだよ。出るよ」

「賞金目当てだったんでしょ。お金ならあげるから」

「そういう問題じゃないよ！」

「じゃあ、何なの」

言われて、亮介はぐっと言葉に詰まった。

確かに亮介は賞金目当てで、大会に参加しようとしていた。

けれど。

何故か。

金銭面の心配がなくなった今でも、大会に参加したかった。棄権したくなかった。

「……」

唇を噛みしめて、必死に考える。どうしたら目の前にいる母親に伝わるのだろうか。胸の中に

ある思いをそのまま取り出して、母親に示せばいいのにと、どうしようもないことまで巡った。

そんな亮介の脳裏に、あるシーンがよぎった。トリックを決めたときの達成感と、物足りなさ。これだ、と亮介は思った。賞金大会に出れば、その足りないものが手に入る気がした。それを手に入れるために、大会に出たかった。けれど、どう言葉にしていいいのか分からなかった。

亮介がまごついている間に、母親は見切りをつけるように首を振った。言い聞かせるように、ゆっくりと母親は断言する。

「とにかく。大会には出ない。いいわね」

ひゅっと亮介の喉が鳴った。自分の思いが伝えられない不甲斐なさも悔しかったが、一方的な決定を押しつけられることに対しても、かなりの屈辱を感じた。知らず、亮介のこぶしが震えていた。

母親は亮介が頷くのを待っているという顔をしていた。その傲然とした様子に、さらに嫌気が差した。

「なんで母さんはそうやって、全部自分で決めようとするの。もう少し俺の話も聞いてよ」

「訳分らないことを言って、駄々をこねているのはあなたの方でしょう。これ以上、話を聞いたって時間の無駄よ」

「だから、なんでそう決めつけるの。押しつけられる身にもなってよ」

「いつ私が押しつけたのよ。私はいつも一番良い道を選んで、提示しているだけよ」

自分は正しい、自分は間違っていない、という母親の態度に、亮介は苛立った。膨れ上がっていく不満を吐き出すように、亮介は叫んだ。

「それが押しつけてるって言うんだよ！」

亮介は母親を睨みつけて、禁句を口にする。

「世間体とか、周りとか、そんなに気にするんだったら、父さんと離婚しなければ良かっただろ！」

ぴくりと母親の頬が震える。

亮介は知っていた。この禁句が、母親にとってどんな侮辱よりも耐えられないことを。いつもの亮介だったら、言わなかった。けれど、今日は我慢が利かなかった。母親の怒りを増長させることを知りながら、亮介は言い募る。

「料理は全然作らねえし、洗濯物は干してねえし、部屋は汚えし！ どこが『普通と一緒に』なんだよ！」

感情を抑えた事務的な口調で、母親は答える。

「ご飯は悪いと思っている。でも、お金渡してるでしょ。洗濯だって掃除だって、仕事の合間に帰ってきてやってるじゃない」

「本当にそれが『普通と一緒に』だって思ってんの？ 違ುದろ！」

バカにしたような亮介の態度に、母親が舌打ちする。

「そう思いたいなら、そう思えば？ でもね、あんたは何もわかつちやいない。私の気持ちなんて、これっぽっちも考えようとしてない」

「母さんだって、俺の気持ち考えたことあんのかよ！」

「何で私があんたのことなんて、考えなきゃいけないのよ！　子供なんだから、親を第一に考えなさいよ！」

「なっ……」

予想外の返答に、亮介は絶句した。

「私があんたの頃は、お父さんとお母さんの気持ちだけを考えてた。どうやったらお母さんたちが喜んでくれるか、いつも考えて行動してた」

「……」

「親が共働きだからって甘えたりしなかった。ずっと家で勉強してた。夜、出歩くななんてことしなかった。そんなことしたら周りになんて言われるか分かってたもの」

「……」

「本当は亮介にスケボーをやめてもらいたいの。夜に出歩くななんて、近所の人に見られたら、なんて言われるか分からないでしょう？」

その言葉で、亮介は母親と自分の間に絶対的な隔たりがあることを悟った。

亮介の目は母親を真っ直ぐ見ていた。

母親の目は常に周囲の人間を見ていた。

視線の交わらない会話は、どこまで行っても分かりあうことは出来ない。亮介は全身からどっと力が抜けていくのを感じた。同時に、もう一つのこととも理解した。

「……そういうことか……」

亮介の呟きに、母親は安堵の笑顔を浮かべた。

「良かった。やっと分かってくれたのね。じゃあ……」

「母さんにとって、俺は恥ずかしいんだね」

母親のすべての評価基準が、周囲の目だとしたら。亮介は、汚点であり、瑕であり、欠点だ。母親が結婚に失敗したという紛れもない『物証』。出来ることなら世間から隠して、なかったことにしてしまいたいほどの汚れ。

驚いたように、母親が目を見張る。

亮介が今にも泣き出しそうな表情で、笑った。

「……今までありがとう」

母親が必死に何か言っていたが、亮介は振り返らなかった。

カバンを持って、玄関へ向かう。ネロが亮介のうしろをついてくる。スニーカーを履いて、スケートボードを抱えると、亮介は小さく笑ってネロの頭を撫でた。

「バイバイ、ネロ。ちゃんと母さんから餌もらえよ」

そして、亮介は家を出た。

Second House

携帯電話越しに「帰る所なくなっちゃった」と笑うと、佑人が飛んできた。顔を見るやいなや、佑人は亮介を自身の家まで引っ張ってきた。

湾岸にそびえ立つ高層マンション。きらびやかなエントランスに恐れおののく間もなく、エレベーターに押し込まれる。佑人はエレベーターの操作盤にＩＣカードをかざすと、最上階である『32』のボタンを押した。

かすかな物音だけで、加速度を感じずに上っていくカゴの中、佑人は無表情のまま、「大会が終わるまでだからな」と言った。

家に入って、まずはカウンターキッチンと、ダイニング、リビングが一続きになっている部屋に通された。ここだけで学校の教室くらいの広さがある。

目を丸くしている亮介を放って、佑人はリビングの隣の部屋へ入っていった。

「亮介、こっち」

呼ばれるままにそちらの部屋へ行く。

そこには勉強机とベッド、本棚、ＣＤラック、オーディオ機器等々、亮介の部屋にもあるようなものが並んでいた。床には大量のスケートボード雑誌が積まれて、いくつもの山になっている。広さは亮介の家のリビングぐらいあったが、なじみのある大きさの部屋に入れて、亮介はほとと息をついた。

「ここが俺の部屋。リビング通らないと玄関にもトイレにも行けないんだ」

適当に座って、と言いついて、佑人は部屋を出ていった。

少しだけ迷って、亮介はベッドに座った。勉強机の上には所狭しと参考書やノートが積まれていることに、亮介は気付いた。

佑人がスポーツ飲料のペットボトルを二本持って、戻ってきた。一本を亮介に渡すと、佑人は勉強机の回転イスに腰を下ろした。

「母さんは仕事でいつ帰ってくるか分からないし、佐人は予備校で遅いし。気兼ねしなくていいから」

「.....ありがとう」

「トイレは玄関まで戻って、左のドア。風呂は突き当たり。他のドアは佐人の部屋と母さんの部屋だから、入らないで。それ以外は好きにして」

「分かった」

佑人は微笑むと、ペットボトルを開けて、口を付けた。そして、「俺もやったなあ。家出」と言った。

「佑人さんも？」

「母さんと喧嘩して、こんなふうに関の家に転がり込んでさ」

あっけらかんと佑人が笑う。

こんな贅沢な家から出ていく理由が見あたらず、亮介は疑問を口にしていた。

「どうして」

「母さんが『大会に出るな』って言って、俺は『嫌だ！』って言って」

自分と同じ理由で、亮介は若干動揺した。誰にも分かってもらえないと勝手に決めつけていた思いが、佑人になら通じる可能性が見えた。不意に芽生えたわずかな希望を押し隠して、亮介は問うた。

「なんで、大会に出たかったの」

「んー。それがよく分かんねえんだよ。でも、あのときは無性に大会に出たくて」

亮介の胸の中で、淡い期待が消し飛んだ。母親との口論の際に伝えられなかった思いを、佑人なら言葉にしてくれると思っていた。

密かに落胆している亮介に気付かず、佑人は話を続けた。

「まあ、結局、事故って、病院送りで、そのまま、家に帰ってきたんだけどな」

ぎょっとして、亮介は聞き返した。

「事故？ 大丈夫だったの？」

「ああ、怪我はね。一週間入院したぐらいで、全然」

「……そっか」

ほっと亮介は胸をなで下ろす。

ペットボトルを手のひらでもてあそびながら、佑人は懐かしい思い出を反芻するように言った。

「病室で母さんが泣いてるところ見て、『あ、帰んなきゃ』って思ったんだよな」

佑人の言葉に、亮介は薄く苦笑いを浮かべた。堅く握りしめたこぶしに目を落として、呟く。

「俺は……そういうことはないだろうな」

「なんで？」

「俺が病気しても、母さん、傍にいたことなかったから。きっと俺が事故っても、あの人は泣かない」

苦い記憶がよみがえってきて、亮介は唇を噛んだ。

あれは亮介が保育園に入っていた頃のことだ。亮介は風邪をひいた。

前の夜から体がだるかったのだが、忙しそうにしている母親に言いたす暇がなく、いつもの通りに夕飯を食べ、風呂に入り、横になった。

翌朝、起き上がれずにいたら、不審に思った母親がやってきて、亮介の熱に気付いた。

その後、病院に連れて行かれたのだが、ずっと一人で病院の長イスで待たされた。母親は廊下の隅で、どこかへ電話をして、しきりに頭を下げている。

診察をしてもらい、薬をもらって、帰宅した。「眠りなさい」と言う母親の言葉に従って、横になった。次に目が覚めたとき、家に誰もいなかった。母親は仕事へ戻ってしまったのだ。

亮介はどうしようもなく寂しさがこみ上げてきて、布団の中でしきりに泣いた。

そして、その夜、両親が激しい夫婦喧嘩をした。「子供の世話を押しつけるな」と主張する母親と、「仕事が忙しい」とくり返す父親。ふたりの怒鳴り声は一晩中続いた。

今の亮介ならば、母親が病院で電話をしていたのは仕事相手だということは分かる。タイトな母親のスケジュールが、子供の病気でめちゃくちゃにされたことも。そのスケジュールの乱れを修正するために、早い段階で職場に復帰せねばならなかったことも。どちらも容易に想像出来る。

そして、仕事に専念したい母親にとって、亮介の存在が邪魔だということも透けて見えてしまう。

「俺……母さんのお荷物なんだ……」

意味を押し量るように、佑人が亮介を見る。

亮介は茶化すように肩をすくめた。

「要らないなら、さっさと捨ててくれれば良かったのに」

「母さんがそう言ったのか？」

真面目な声が返ってくる。

亮介は頭を振った。

「……言わなくても……分かる……」

「ふうん」

ペットボトルのふたを口元に当てて、佑人は黙り込んだ。

今さらながら、深い話をし過ぎたかも知れないと、亮介は不安になった。いくら仲が良いからといって、家庭の事情なんて話されても重いだけではないだろうか。

面倒くさい人間というレッテルを貼られ、今後の友人関係を疎遠にされるくらいなら、冗談ということにしてしまおう、と亮介が思い立ったとき、佑人が口を開いた。

「人なんてさ、何考えてっかわかんねーよ」

「え……？」

意外な言葉に、亮介は目を瞬いた。

そっぽを向いたまま、佑人は淡々と語る。

「全然想像してなかったこと、考えてたりするんだぜ」

「……」

意味を、掴みかねた。これが口先だけの言葉だったら、亮介もまともには聞かなかった。けれど、佑人の言葉は、佑人の本心だということが伝わってきた。普段は奥底にしまってある物を、亮介のために引っ張り出して、わずかに見せてくれたような。そんな大切なことなのに、全てを理解することが出来なくて、亮介はもどかしさを感じた。

返す言葉が見つからずに喘いでいたら、佑人が亮介を振り返った。

「なんてな」

佑人が笑って、はぐらかした。まるで、さっきの言葉は冗談だったというふうに。

ちくりと亮介の胸が痛んだ。亮介が何も言わなかったせいで、佑人は自分の言葉が空振りだったと思ってしまった。佑人の本気の言葉だったのに。亮介のために、言ってくれたのに。佑人にそんなことをさせてしまった自分が情けなくて、亮介は肩を落とした。

「……」

「もう寝な。ベッド好きに使っていいから」

頷いて、亮介は布団に潜り込んだ。掛け布団越しに、佑人が参考書やノートを開く音が聞こえてきた。佑人の鉛筆の音を聞きながら、亮介は夢に落ちた。

灯りを点けたまま眠ったせいか、その夜、亮介はとても鮮明な夢を見た。

小学生の亮介が玄関先に立っている。母親が三和土で靴を履いて、振り返る。亮介の頭を母親の手がなでた。

「いい子で大人しくしているのよ」

玄関が閉じる。軽やかなヒールの音が、遠ざかっていく。

とぼとぼと亮介はリビングへ戻り、テレビを付けた。テレビからは笑い声が絶え間なく流れ込んできく。けれど、亮介の気持ちは一向に浮上しなかった。

亮介の傍らでネロが丸くなって、眠っている。亮介はネロを抱き寄せて、目を閉じた。

「ねえ、ネロ。僕いい子にしてるよね。なんでママは帰ってこないんだろう」

.....いい子が足りないのかな。

すくい上げられるようにして、亮介は目を開けた。一瞬、どこにいるか分からなかったが、隣で眠っている佑人と、部屋を見て、ようやく思い出した。

体を起こして、ベッドサイドの時計を見る。七時を指している。佑人を起こさないようにベッドを下りて、亮介は部屋を出た。

リビングに出ると、ダイニングルームに佐人がいた。ダイニングテーブルで、新聞を読んでいる。亮介が動くより先に、佐人が顔を上げた。

「ああ、目が覚めたか。少年」

「あ、あの……俺……」

「佑人から話は聞いた。大会まで泊まり込むそうだな」

「どうやら佑人はうまいこと言っておいてくれたらしい。」

亮介はぎこちなく頷いた。

「全く、おまえ等は本当にスケボーバカだな」

いつもの見下した物言いではなく、微かに笑いを含んだおだやかな口調で、亮介は張り合いが抜けた。

佐人は音を立てて新聞を畳むと、テーブルの上をあごで示して、言った。

「食べられるなら、食べていいぞ。母さんはさっき帰ってきて、速攻で寝たからな。昼過ぎまで起きてこない」

テーブルの上には、三人分のスクランブルエッグとトーストが並んでいた。コーヒーメーカーには、たっぷりのコーヒーが用意されている。

亮介は朝食をしげしげと眺めて、聞いた。

「これ……お前が作ったのか……」

「他に誰がいる？」

「えっと……」

佐人は鼻で笑って、答えた。

「言っておくが、母さんの料理はマズイぞ。佑人の料理は人の食べるものじゃない。俺がやるのが一番丸く収まる」

確かに筋は通っているが、亮介は目の前の人物が料理を作ったということが、素直に呑みこめなかった。じっとテーブルの上を見詰めていると、佐人が「食べないのか」と言った。

慌てて、亮介はダイニングテーブルについて、手を合わせた。

「いただきます」

朝食はまだあたたかく、そして美味しかった。知らず亮介は「美味しい」と呟いていた。

佐人が誇らしげに笑む。

「だろう？」

朝食を頼張りながら、亮介はこうして誰かと朝食を共にしたのはいつ振りだったろうかと考えたが、思い出せなかった。

あたたかい手料理というのも、久しぶりで、亮介は微かに感動した。確か、亮介がまだ小学校

に上がるまでは母親は食事を作ってくれていた。それがいつの間にか、シリアルになり、千円札へと変わっていた。

トーストを齧りながら、亮介は問うた。

「いつからやってんの？」

佐人は左斜め上を見るようにしながら、答えた。

「小学生……くらい、か？」

亮介は軽くショックを受けた。今の亮介より年が下の頃から、佐人は料理をしていたという。亮介は自分の中にあった『子供は食事を食べるもの、母親が食事を作るもの』という先入観が崩れていくのを感じた。

カップにコーヒーを注ぎながら、佐人が聞いた。

「お前はやらないのか？」

「母さんが……俺が火使うの嫌がるから……」

母親は亮介が一人でいるときに、ガスを使うことを禁止していた。ただ、それは小学生の頃に言い渡されていたことで、改訂されないまま今に至っている。中学生になった今もその命令は有効なのだろうか。亮介が望めば、変わるような気がした。では、どうして今まで望まなかったのだろうと自問する。

考え込んでしまった亮介をよそに、佐人は「なるほど」と頷いて、コーヒーに口を付けた。

「興味があるなら、やってみるといい。楽しいぞ。なにより母親が喜ぶ」

毒のない佐人の笑顔に、亮介は素直に頷いた。

壁の時計を見て、佐人は立ち上がった。

「俺はもう出るが、お前はどうするんだ」

「学校、ここからだ八時過ぎに出れば間に合うから」

「分かった」

食器を持って、佐人が立ち上がる。カウンターキッチンの中へ回って、流しに皿を置く。一連の流れを、亮介はじっと目で追った。

佐人がリビングを出て行ったあと、しばらくして、玄関のドアを閉める音がした。

途端に家の中がしんとした。いつもの朝ならば、車の音や、鳥のさえずり、小学生の笑い声、いろんな音が聞こえてくるのに、ここはひどく静かだ。時間の感覚があいまいで、亮介はからになった皿に目を落としたまま、ぼんやりしていた。

気付いたら、時計の針は八時を指していた。

佐人にならって、亮介も食べ終わった食器を流しまで持って行った。流しには、さっき佐人が置いた食器もあった。

おもむろに亮介は食器を洗い出した。ひとつひとつ丁寧に洗っていく。作業は淡々としていたが、苦痛ではなかった。寧ろ、楽しかった。

食器カゴに最後の皿を入れたとき、リビングに誰かが入ってきた。顔を上げた亮介は、次の瞬間、固まった。

女優の藤原(ふじわら)小枝子(さえこ)が、そこにいた。佑人と佐人の母親なのは聞いていた。

でも、こうしてテレビの中で見ていた人物が、現実目の前に現れると訳もなく緊張した。

ガウン姿の小枝子は亮介を見て、大きな目を見開いた。

「あら、あら、あら」

化粧っけはないが、充分に艶のある笑顔を浮かべて、小枝子はつつつと近寄ってきた。亮介はどぎまぎしながら、突っ立っていた。

「亮介くんでしょ？ 佐人から聞いたわ」

小枝子は楽しそうに亮介を観察した。そして、コーヒーをカップに注ぐと、カウンターキッチンの脇に立った。亮介の手元をのぞいて、小枝子は意外そうに声を上げた。

「あら、洗い物してくれたの？」

「あ、えと」

「ありがとね」

満面の笑みを向けられて、亮介はうつむいた。

「きっとお母様のしつけが良いのね」

「……はぁ……」

違います、と言うのは憚られて、あいまいに亮介は頷いた。

小枝子は楽しそうに話しかけてくる。

「亮介くんは佑人とどういう関係？」

「え、と。スケボーの……」

「ああ、そうなの。佑人、最近どう？」

「巧いですよ。すごく」

断言すると、小枝子は驚いた顔をした。

「あら、そうなの？」

その反応に、逆に亮介が戸惑った。

「はい……すごく……巧いですよ……」

「最近、調子悪そうだったし、大会でも入賞出来ないみたいだし、大丈夫かなって思ってたんだけど」

「半年前の大会は、あれは、当日、調子が悪かっただけで、練習の時は出来てたんです。三ヶ月前も次点で、上にあと一人いなかったら、佑人さんが入賞していたんです」

亮介は必死に佑人の弁護をすると、小枝子がくすくすと笑った。その笑顔がとても上品で、亮介は思わず見とれていた。

「亮介くんはいつ佑人と知り合ったの？」

「一年とちょっと前です。俺が中学生になる春休みのとき」

「ふうん」

「佑人さん、そのときスランプだったみたいで、みんなから隠れて練習してて。怪我して動けなくなってたところを、俺が偶然見つけた、みたいな」

言って、亮介は微笑んだ。

今でも亮介は昨日のここのように思い出せる。

初めて佑人と会ったあの日のこと。

当時、亮介はスケートボードを買ってもらったばかりだった。春休みなのをいいことに、毎日、朝から晩まで練習をしていた。

あの日も橋に行く途中、通り道代わりに近所の公園を突っ切った。

春の陽気に草木が一気に生え、植え込みなども向こう側が見えないくらい茂っていた。

そんな植え込みの前を通りがかったとき、スケートボードの音がした。音は茂みの奥からしていた。木々に阻まれて、様子はいかがえないが、誰かが練習しているらしい。

そのまま、亮介は通り過ぎようとした。

「うわっ」

叫び声と共に、何かがぶつかる派手な音がした。かすかにうめき声も聞こえてくる。

少しの間、迷って、亮介はおずおずと茂みの中を覗いた。そこでは佑人が足を抱えて倒れていた。スケートボードが離れた所でひっくり返っている。倒れた佑人のひざから血が流れていた。

「大丈夫ですか？」

思わず、亮介は駆け寄った。佑人はうめくだけで、答えられない。困惑しつつも、亮介はリュックサックから水と絆創膏を取り出して、佑人の手当てをした。

しばらくして、佑人は動けるようになった。佑人は亮介にお礼を言うと、片足を引きずりながら、帰って行った。

その場は、それきりだった。佑人と二度目に会ったのは、あの橋でだった。

トリックに失敗して、コンクリートに仰向けになっていた亮介を、佑人が上から覗き込んだ。

「あ、やっぱり。昨日はありがとな」

慌てて、亮介は起き上がる。

佑人のひざは、ちゃんと手当てがされていた。

楽しそうに佑人が話しかけてくる。

「何やってたの、今」

「……ノーズスライド」

スケートボードで段差に乗って、滑るトリックだ。基本中の基本のトリックだが、初心者の亮介にはまだ難しかった。

「ん。分かった。見てろ」

言うが早いか、佑人は自身のスケートボードを道路に放って、飛び乗った。そして、軽々とノーズスライドを決めてみせた。亮介は目を丸くした。

戻ってきた佑人は、あれこれ教えてくれた。

「さっき見てたらさ、スライドしているときにバランス崩して落ちた、って感じだったから、体重のバランスをもうちょっと考えてやってみ。ジャンプはちゃんと出来てるから、バランスさえ取れば、決まると思うよ」

「……うん」

不思議なことに、佑人のアドバイス通りに動くと、自然とトリックが決まった。

トリックが決まって、呆然としている亮介の手を取って、佑人はとても喜んでくれた。

スケートボードを始めたばかりで、友達のいなかった亮介は、トリックを決めたときに自分以外の誰かが喜んでくれることが初体験だった。心の底から、亮介は嬉しかった。

「それから何回か話して、ようやくスケボー雑誌で見てた『藤原佑人』だって気付いたんです。にぶいですよ。雑誌に写真たくさん載ってるのに」

「あの子、写真映りだけはいいいから。実物見ると幻滅するのよ。そういうとこ私そっくり」

小枝子の軽口に、亮介は静かに横に首を振った。

「そんなことないです。実際に目の前で佑人さんのトリック見て、本当感動して。かっこいいって思いました。だから、佑人さんは俺の師匠なんです」

亮介が言い切ると、小枝子は嬉しそうに微笑んだ。

「そう」

「佑人さんのスケボー、見たことありますか」

「ええ、何回か大会を見に行ったわ」

「難しいトリックをさらっと決めちゃうところもすごいんですけど、なんていうか、楽しそうなんですよ、佑人さん。見ていて、こっちまで楽しくなる、みたいな。そういうところが本当にすごいんです」

「なるほどね」

「佑人さん、企業からオファーとか来てないんですか？ 絶対に佑人さんなら、プロライダーとして生きていけると思うんですよ」

一瞬、小枝子の顔が曇った。

小枝子が何か言いかけたとき、佑人が部屋から飛び出してきた。

驚いて、亮介と小枝子が振り返る。

佑人も二人を見て、止まった。

「亮介？ 学校、大丈夫か？」

「あ、うん。ここからだ八時過ぎに出れば間に合うから」

佑人に言ったのと同じ台詞を口にしながら、亮介は壁の時計を見て、青ざめた。すでに時計の針は、八時半を過ぎている。

「間に合わない！」

急いで、亮介は佑人の部屋へ駆け込んだ。

入れ違いに佑人がリビングを駆け抜ける。

「母さん、いってきまーす」

「いってらっしゃーい」

佑人の部屋から亮介が飛び出してきた、叫ぶ。

「佑人さん！ 俺も一緒に行く！」

「いってらっしゃーい」

「あ……い、行ってきます！」

亮介は小枝子にお辞儀して、慌ただしく藤原家を後にした。

駅までの道すがら、佑人は走りながら、亮介に言った。

「今日は補習ないから、四時には橋に行けるから」

亮介は笑顔で頷いた。

それからの一週間は早かった。

昼間は学校へ行き、夜は橋で練習する。

橋で練習する以外でも、ずっと佑人とスケートボードに関する話をしていた。

朝、亮介は自主的に早く起きて、佐人の手伝いをした。

そんな日々を過ごしていたある日、学校で担任に呼びとめられた。

「水上のお母さんからさっき電話があったぞ」

「……あ」

不意打ちだったので、亮介は思いっきり言葉に詰まった。

「お前が学校に来ているかという確認だった」

「……はい……」

「俺は正直に『来てます』と言っておいた。それだけ。じゃ」

担任はサンダルをペタペタ鳴らして、行ってしまった。説教されると思い、体を固くしていた亮介は拍子抜けして、思わず担任を追いかけた。

「それだけですか」

「そうだ。それ以上、なんて言って欲しかった」

「えっと……」

担任が立ち止まって、振り向く。亮介のことを頭の先から足先まで、丹念に眺めた。

「髪の毛は毎日洗っているようだ。ワイシャツも毎日洗いたて。腹も空かせてない。ということは、風呂に入れて、洗濯ができて、食事が出来る環境にいるってことだ。これが非行に繋がっているって思えるか？」

亮介はぼかんとして、担任を見つめた。それから慌てて、首を横に振った。

「だろう。じゃあ、問題ないだろう」

そう言うと、担任はまた歩いて行ってしまった。亮介は担任に向かって、深くお辞儀した。

充実した日々は、たちまち過ぎ去り、いつの間にか大会前日になっていた。夕食後に亮介が皿洗いをしているところへ、小枝子が帰宅した。またもや嬉しそうな顔つきで、小枝子は亮介の傍へ寄ってきた。

亮介は思い切って、聞きたいと思っていた問いをぶつけてみた。

「あの、佐人が料理を作っているのって、どう思ってます」

「どうって？」

「自分の……母親としての仕事を……取られたとか」

小枝子は左斜め上を見るようにしながら、答えた。

「私の役目はお金を稼いでくることだから、別にそうは思わないな」

「え？」

「私、あの子たち産んだ後、すごく忙しくて。周囲の反対を押し切って産んだから、『産んだのは正解だったんだぞ』って周囲に認めさせたくて、仕事も育児も全部完璧にやろうとしたの」

母親と同じだと亮介は思った。

完璧主義者の母親は、現在進行形で周囲に認めさせようと頑張っている。

「でもね、それって結局無理なのよ。余裕がなくなっちゃって、ピリピリしちゃって、仕事にも影響しちゃって。そんなときにマネージャーに言われたの」

「……なんて」

「『ドラマをひとつ作るにも、監督がいて、音響さんがいて、メイクさんがいて、他にもたくさんのスタッフさんがいて、役者がいる。全員がそれぞれの役割の中で最高の力を発揮して、ひとつの作品を作ってる。人生も同じ。あなたにはあなたの役割だけを頑張ればいいの。それ以外は他を頼りなさい』って」

「……」

「私の役割はあの子たちを食べさせていくためにお金を稼いでくること。それ以外は他を頼るの」

小枝子は穏やかな微笑みを浮かべた。そこには歪んだ負い目や、気を張っている様子はなかった。背筋を伸ばして立っている姿は、とても綺麗だと亮介は思った。

「だから、佐人が料理をしてくるのは、役割を取られたとは思わない。助かっているわ。すごく感謝している」

小枝子の心からの言葉だと、亮介は分かった。彼女の子供である佑人と佐人が、亮介はとても羨ましかった。同時に、自分の母親がひどく子供っぽく感じて、つい亮介は愚痴をこぼした。

「家事を……全部やりたがる人がいて……洗濯物を勝手に干したりしたら、喜ばれるどころか、苦い顔をされる場合……どうしたら良いんでしょうか……」

亮介自身の母親のことを指していることは明確だったが、小枝子は特にそこには触れなかった。もう一度、左斜め上を見るようにしながら、小枝子は答えた。

「自分で全てを抱え込んでじゃう人って結構いるのよね。そういう人には『頼るのは悪いことじゃない』って教えてあげる誰かが必要よね。私はマネージャーが気付かせてくれたから良かった

けど」

その言葉で、亮介は自分の中で捉え所がなく広がっていたものが、一つに集約していくのを感じた。宙を見つめながら、その感覚を正確に辿っていく。

急に黙り込んでしまった亮介の横顔を見て、小枝子はくすりと笑った。

「答えは出たかしら？」

我に返った亮介は、慌てて頭を下げた。

「ありがとうございました！」

「明日、大会頑張ってね」

綺麗な微笑みを残して、小枝子はリビングを出ていった。

亮介は唇を噛みしめて、深く頷いた。

Tournament

大会当日の朝、亮介は荷物を背負って、立ち上がった。ベッドではまだ佑人が眠っている。小声で「行ってきます」とささやいて、亮介は部屋を出た。

ダイニングルームでは、いつものように佐人が新聞を読んでいた。亮介はテーブルの横に立って、声をかけた。

「俺、練習してから会場行くって、佑人さんに伝えてくれる」

「ああ、分かった」

「じゃ」

「亮介」

呼ばれて、亮介は振り返った。

「頑張れよ」

真っ直ぐな激励に、亮介はガッツポーズで答えた。

J Rと私鉄を乗り継いで、最寄りの駅まで一時間半。そこから会場のスケートパークまでは十分ほど歩く。

真夏の太陽にさらされ、亮介は帽子の下から流れ落ちてきた汗を拭った。

大きな幹線道路に出ると、潮風が吹き付けてきた。会場は海沿いにあり、この幹線道路を道なりに行ったところにある。

潮風が体にこもった暑さを吹き飛ばしていく。知らず、亮介は息をついた。

しばらく歩くと、行く手からスケートボードの音と、子供たちのはしゃぐ声、人の歓声が聞こえてきた。亮介は地元で練習してから来たが、遠方の人間は大会の前に会場で練習をする。会場にはかなりの人がいるようだ。

亮介は大きく深呼吸をして、足を早めた。

と、スケートパークの入り口付近に佇んでいる人影があった。だぼだぼのパーカーにハーフパンツ。手にはスケートボード。会場ではいくらでも見かける格好だが、背格好が佑人に似ている。

「佑人さん！」

亮介は笑顔で駆け寄った。

人影が振り返る。

「良かった。間に合ったんですね。俺も今、来たところで……」

あと二歩という距離で、亮介はぴたりと止まった。

佑人と同じ顔。同じ服。でも、眼鏡をかけていた。

「……佐人？」

佑人に似た顔は、薄く笑った。

「なんで……その格好……」

佐人が外出するときは必ずブレザー姿で、佑人と同じ格好は絶対にしなかった。

肩をすくめて、佐人は言った。

「佑人から伝言。『大会、頑張れ』だと」

「え？」

「あいつは来ないよ。今日は予備校の入校テストだから」

「……何、言って……」

「はじめからそういう約束だったんだ。大会が終わったら、予備校に入るって」

言われて、亮介の脳裏に、佑人にコーチを頼んだときの様子がよみがえった。

『関係ないわけないだろう。佑人は……』

『佐人！』

『亮介の大会が終わるまでだ。大会が終わったら、さっきのこと、やるからさ』

あのとき腑に落ちなかったことが、ようやく納得出来た。けれど、まだ疑問点があった。

「なんで、予備校なんか」

「佑人はもう限界なんだ」

「え？」

「ここ最近、大会で入賞すらしてないだろう」

最後に佑人が賞を取ったのは、一年前の大会だ。半年前も三ヶ月前も、賞を逃している。

「……でも、それは……」

「佑人も気付いてる。自分の才能がここまでだってことに。スケボーでは生きていけないって薄々勘づいている」

「……」

「趣味で続けていく分には構わない。今すぐに代わりの進路を見つけなくても良い。ただ、大学には行って欲しい。それが母さんの望みだ」

そこまで聞いて、小枝子と話していたときの違和感の正体が分かった。

『ああ、そうなの。佑人、最近どう？』

『巧いですよ。すごく』

『あら、そうなの？』

『はい……すごく……巧いですよ……』

『最近、調子悪そうだったし、大会でも入賞出来ないみたいだし、大丈夫かなって思ってたんだけど』

小枝子は知っていたのだ。佑人がすでに限界で、別の道を選択したことを。

亮介だけが知らなかった。考えなしに佑人を巻き込んで、頼りきっていた。

「佐人っ……俺っ……」

「優勝したら、これはお前の物だ。頑張れよ」

佐人は抱えていた佑人のボードを示した。佐人の目は、純粹に亮介を応援していた。それが亮

介にはつらかった。考えなしだとなじられた方が、まだ良かった。頭を振って、亮介は言い返そうとした。

が、そこへ叫び声が割り込んだ。

「亮介！」

驚いて、亮介は振り返った。

幹線道路を挟んだ反対側の歩道に、亮介の母親がいた。

「母さん」

いつものスーツ姿だが、ワイシャツはしわだらけで、髪の毛も乱れていた。亮介は一度だけ、こんな状態の母親を見たことがあった。会社に一週間泊まり込みをしたときに、こんな状態で母親は帰ってきた。

ふと亮介の頭に疑念がよぎった。もしかして、亮介が家を出てから、母親は一度もまともに眠っていないんじゃないか、と。

「亮介……」

ふらふらと母親は車道に出てきた。亮介はどうしたら良いか分からず棒立ちになっていたが、向こう側から走ってくる車に気付いた。

「母さん！ 危ない！」

咄嗟に、亮介は飛び出していた。間一髪で母親を抱きかかえたまま道路に倒れ込む。車の運転手が、暴言を叫んで、走り去っていった。

「亮介！ 大丈夫か！」

佐人が駆け寄ってくる。右肩を押さえて、亮介は悶える。体を起こした母親は、心配そうに亮介をのぞき込んでいた。

「亮介？」

佐人は亮介の傍らにひざまずいて、問う。

「肩……この前と同じ所か？」

亮介は苦しみながら頷いた。

「そうみたい……」

「とにかく救護室へ行こう。立てるか？」

亮介を抱きかかえるようにして、佐人は立ち上がった。

スケートパークの救護室の前で、心配そうに母親が立っていた。

しばらくして、亮介と佐人が救護室から出てきた。

「亮介」

佐人が母親と亮介の間に立って、説明する。

「一応、手当てはしました。外から見た限りでは打撲のようですが、骨の状態は病院で診てもらわないと分かりません」

母親は亮介をなだめるように、言った。

「もうやめよう、亮介」

亮介は首を横に振る。

「大丈夫。そんな痛くないし」

「でも」

「今やめたら、教えてくれた佑人さんに悪い。それに」

亮介は顔を上げた。

真っ直ぐに母親を見る。

その視線は、以前のような自分の意志を押しつけるだけのものではなかった。相手の心情を気にかけた上で、それでも自分を分かって欲しいと願う光をたたえていた。

「母さんに見てもらいたいんだ」

「え……」

母親は目を見張った。

精悍な顔つきで、亮介は言う。

「仕事が忙しいのは知ってる。けど、ごめん。今日だけは、ここにいてください」

亮介は母親に頭を下げた。そして、母親の顔を見ずに、彼女の横を通り過ぎた。背筋を伸ばし、亮介は歩いていった。

佐人と母親は日射しを避けるように、観客用のテントの下に入った。

傍にあるU字型の構造物を指差して、佐人が説明する。

「あれがヴァーチカルです。あの中で選手は演技を行うんです」

ヴァーチカルの周りには、大勢の観客が集まっていた。佐人や母親のようにテントの下で見ている人もいれば、炎天下の中で応援している人もいる。大勢が盛り上がっている様子に、戸惑うように母親は周囲を見渡した。

別のテントには放送席があり、そこでアナウンサーが熱のこもった実況をしている。

「さあ、新城選手、最後の大技にいくか！」

滑っている少年が、勢いよくトリックを決める。が、バランスを崩して、足を着いてしまった。観客から残念そうな声が漏れる。

「予選は六十秒の一本勝負です。難易度の高い技を、完成度高く行うことがキーポイントになるんですが、他にもどれだけ会場を沸かせたかとかも審査の対象になります」

次の選手が呼ばれ、演技が始まった。ヴァーチカル脇にある競技用のストップウォッチがカウントダウンを始める。

「エントリーナンバー十四番、赤岩遼！ ファーストリックは……おおっと、失敗した」

一度、足を着いてしまったが、選手は気を取り直すように滑り出した。勢いをつけて、壁の頂上でトリックを決める。

「出た！ キャスパーM80！」

わっと観客が沸く。勝手が分からず、きょろきょろしている母親に、佐人が話しかける。

「今、選手がジャンプしたとき、デッキが裏返しになったでしょう。あれがキャスパーっていうトリックです。M80というのは体をねじってから、ジャンプしたってことです」

「難しいの？」

「かなり。上位者レベルですね。この前の選手もかなり上のトリックをやっていたし、今回はレベルが高いですね」

「……」

「でも、さっきも言った通り、ノーマスでやることに意味があるんです。亮介はハイレベルなトリックは少ししか出来ませんが、確実にやれば優勝は狙えます」

「……」

佐人の言葉に困惑しつつ、母親はヴァーチカルに目をやった。

十四番の選手の競技が終わった。

「さあ、次はエントリーナンバー十五番、水上亮介！」

緊張した母親が見守る中、亮介がヴァーチカルに進み出る。デッキに片足を乗せた状態で、中央に立つ。ストップウォッチがカウントダウンを始める。亮介がコンクリートを蹴った。

一度、壁を上りきり、戻ってくるスピードを利用して、反対側の壁の頂上でトリックを決める。

「キックフリップM80！」

アナウンサーの楽しそうな声にあおられるように、観客も興味津々に亮介を見つめる。

「キックフリップはデッキを横回転させる技です。……あいつ、M80も出来るようになってんだ」

後半は佐人のひとりごとだった。感心するような口調だったが、母親は心配そうに亮介を見ている。そして、ためらうように佐人へ聞いた。

「あの、亮介の怪我、本当に大丈夫なんですか」

「えっ」

「なんか、今、すごく苦しそうに見えて……」

亮介は真剣な表情で、次のトリックも決めた。苦しんでいる素振りは見当たらない。それでも、母親は不安そうに、亮介の姿を目で追っている。

一瞬、佐人は迷って、口を開いた。

「あいつ、平気な顔してましたけど、本当はすごく痛いはずですよ」

息を吞んで、母親が佐人を振り返った。

佐人は自身の右肩の辺りを指さし、くるりと円を描いた。

「これくらい派手に腫れてましたから。湿布を貼って、誤魔化してますけど、あんな激しい動きをしたら、相当の衝撃があるはずですよ」

「やっぱり……」

手を固く握りしめて、母親はヴァーチカルに目をやった。ちょうど、亮介が三本目のトリックを決めたところだった。着地の際に、亮介が苦しそうに顔を歪めた。

「亮介……」

祈るように、母親は呟いた。

亮介の演技に、会場内のボルテージが高まっていく。アナウンサーが興奮した声を上げた。

「ここまでノーミスだ！ 水上くん！ さあ、ラスト十秒！」

最後の大技、ハンドプラントをくり出すために、亮介は勢いよく壁をのぼった。壁の端でデッキを蹴りあげる。コンクリートに左手をついて、逆立ちする。

瞬間、亮介の体に、激痛が走った。

ぐらりとバランスを崩しかけた。

そのとき。

「亮介ー！」

母親の声援が、亮介の耳に届いた。

「頑張れー！」

自然と、亮介の体は回転し、トリックは成功した。

観客が、沸き返る。

横のテントでは、母親が口元を押さえたまま震えていた。

佐人が目を丸くして、呟く。

「あいつ、やりやがった」

会場が熱狂する中、亮介はスピードを落とし、ヴァーチカルの中央で足をついた。大きく息を吐いて、空を見上げる。真夏の空が、青く青く広がっていた。

Outcome

ヴァーチカルの横のテントへ、亮介は歩いていった。母親と佐人が、待っている。今にも泣き出しそうな母親を見て、亮介は微笑んだ。

不意に、ぐらりと亮介がふらついた。慌てて、母親が手を伸ばす。母親を逆に引き寄せて、亮介は左腕で抱きしめた。

「声援、ありがとう。すげー力出た」

「うん」

「俺、優勝したよ」

「そうね」

「賞金もらえるんだ」

「そうね」

「修学旅行のお金も、自分で出せるよ」

母親は大きく頷いて、「そうね」と言った。

亮介はためらいながら、ゆっくりと胸の内を吐露した。

「俺、母さんに認められたかったんだ。大会に出て、優勝したら、一人前だって認めてもらえる気がしたんだ」

「亮介……」

「俺……頼りないけど……でも……母さんを支えたいんだ」

母親の目に涙があふれる。

左腕に力を込めて、亮介は伝えた。

「一人で頑張らないで。俺にも頼って、母さん」

「……分かったわ」

母親の涙声が、亮介の中にこだまする。

満足げに亮介は大きく息をついた。ようやく、思いが届いた。

亮介の髪をなでながら、母親はささやいた。

「気付かない間に、大人になってたのね」

笑って、亮介は母親の首もとに顔を埋めた。

Epilogue

真夏の日差しにさらされながら、亮介は中学校の校門をくぐった。すでに学校は夏休みに入っていた。校庭ではサッカー一部と野球部がひしめきあいながら、練習をしている。陸上部が校庭の隅の方で、棒高跳びをしている。体育館の方からもバスケットボール部の練習している様子や、剣道部の竹刀がぶつかり合う音が聞こえてくる。

校内に入ると、ひっそりと静まり返っていた。生徒会や文化祭の実行委員は夏休み中も登校しているという話は聞いていたのだが、亮介には彼らがどこにいるか分からなかった。

暗い廊下を歩いて、職員室へ向かう。

職員室では壊れかけの扇風機が申し訳程度の風を送っていた。窓は全開なのだが、室内にはムッとした熱気がこもっていた。そんな中で、担任は席で何かの書類に目を通していた。

「先生」

亮介が声をかけると、担任が顔を上げた。縮れたくせ毛が揺れる。

「おう。水上か」

手招きされるままに、亮介は担任の傍へ歩いて行った。

担任は書類を机の上に放って、座ったまま亮介に向き直った。

「どうだ。金、出来たか」

「はい！」

満面の笑顔で、亮介は封筒を差し出す。封筒の中身は一万円札が三枚。確認すると、担任は満足そうに頷いた。

「二十五日に間に合ったな。良かった良かった」

「振込じゃなくて、大丈夫だったんですか」

「あのときはああ言ったんだけど、実は夏休み前に旅行会社からせつつかれてな。俺がお前の名前で入金しといた」

「えっ」

「だから、お前が『やっぱり行けません』って言わなくて良かったよ。俺の三万円が無駄になるとこだった」

冗談めかして、担任は笑う。

つられて、亮介も微笑んだ。

「よし、これで今日は呑みに行こう」

担任は嬉しそうに封筒を鞆にしまった。

一息ついた亮介は、ふと職員室を見渡して、言った。

「先生以外、誰も来てないんですか」

「いや、部活の顧問とかはいるよ。今はみんな部活の方に行ってる。俺は生徒会の付き添い」

「ああ、なるほど」

「そうだ。水上。このあと、暇か」

「なんでですか？」

「生徒会の奴らが登校日に全校生徒に渡すプリントを印刷しているんだが、人手が足りないら

しい」

「先生は手伝わないんですか」

「印刷室って暑いじゃん」

正論に、亮介は返す言葉がなかった。確かに、印刷機の発する熱で、印刷室は大変暑苦しい。一度、担任のプリント作りを手伝った際に、亮介は嫌というほど思い知った。

「俺にその地獄へ行けと言うんですか」

「不足金、待ってあげたじゃん。これで貸し借りなしってのはどうよ」

にやっと担任が笑う。

その笑みにたじろぎながら、亮介は断った。

「ごめんなさい。今日はちょっと……」

「なんだよ。なんかあんのか」

亮介は満面の笑みで答えた。

「スーパーのタイムセールがあるんです！」

「は？」

担任が目丸くする。

職員室の時計を見て、慌てたように亮介は言った。

「三時からなんです。遅れそうなので、すみません。また今度」

お辞儀をして、足早に職員室を後にする。

校門を出ると、亮介は走り出した。

一番近くの近所のショッピングセンターまで、学校から歩いて十五分。国道沿いの道をひたすら道なりに行けばいい。

途中で、予備校の横を通った。一階がガラス張りになっていて、中で勉強している様子が見える。亮介は予備校の中で勉強している佑人と佐人を見つけた。佐人が参考書を指さしながら、熱心に佑人へ何かを教えている。佑人も頷きながら、何かを書き留めている。

大会以来、佑人や佐人とは疎遠になっていた。橋へ行っても、ふたりの姿は見かけなかった。

最初の約束通り、亮介は佑人のスケートボードをもらった。けれど、一度も使わないまま、部屋に置いてある。佑人の受験が終わったら返そうと、亮介は決めていた。

佑人のスケートボードは魅力的だけど、佑人自身がいなければ意味がなかった。

やはり亮介にとって、佑人はスケートボードの師匠であり、一番の友人だった。大会に出なくなったとしても、一緒に練習をして、遊びたかった。

「頑張れ」

小さなエールを送って、亮介は予備校の前を通り過ぎた。

ショッピングセンターの前で、亮介の携帯電話が鳴った。ディスプレイに『母親』と表示されている。

「何？ 母さん？」

「ごめん。亮介。私の部屋に脱ぎっぱなしにしてあるブラウス、あれ、明日着たいの！ お願い！ 洗っというて！」

「仕方ないな。今度はちゃんと出しといてよ。ドライだよな」

「そうそうそう。よかった。頼りになるわ。亮介」

母親の声に、亮介は微笑んだ。

「当たり前だろ」

通話を終了して、亮介は空を見上げた。雲ひとつない夏空だ。こんな吸い込まれそうな青い空の下で、ハンドプラントを決めたら、さぞかし気持ちいいだろうな、と亮介は思った。

去年の今頃だったら、迷わずスケートボードを手に、橋へ走って行っていただろう。けれど、今の亮介にはやらなければならないことがある。母親の笑顔を見るために、亮介が自ら率先して行っていることだ。

大会のときは大見得を切った亮介だったが、実際に母親の代わりに家事をやってみたら、散々な出来だった。

洗濯をしようにも普通のものとドライのものの別が分からず、一緒に洗ってしまって、母親の大切にしていた服を駄目にした。

掃除をしようにも掃除機のゴミパックの替え方が分からず、そのまま使い続けて、詰まらせた。

亮介自身も呆れるくらい、失敗をくり返した。

帰宅した母親が亮介の作り上げた惨状を見る度に、悲鳴を上げて、ぐったりした。だが、そのあとで、ちゃんと正しいやり方を亮介に教えてくれた。

亮介も必死に覚え、短期間で基本的なことはマスターした。今は一週間の献立を考えながら、買い物をする技を習得中だ。

母親はハラハラしながらも、亮介を見守っている。近頃は亮介に任せられる部分が多くなり、家事に割いていた時間を仕事に回せるようになった。その分、余裕が出来、仕事も上手くこなせるようになった。最近では徹夜の回数が減ってきた。なによりも亮介が夕飯を作って待っているという事実が、仕事へのやる気につながっていた。

亮介は母親と暮らし始めた二年間を思い返してみた。亮介は母親の顔色をうかがいながら生活していた。母親の怒りには触れたくなかったので、すべて母親の言う通りにしていた。母親は仕事と家事の両立でいっぱいいっぱい、亮介に気を配る余裕はなかった。

現在の二人の関係が、最良のものかと問われると、亮介にもよく分からなかった。けれど、亮介は母親を支え、母親は亮介を見ている。十分に満ち足りていた。

ショッピングセンターの前が、にわかに賑やかになり、亮介は我に返った。

「あ、セール始まっちゃう」

亮介は軽やかにショッピングセンターへ入っていった。